

飛鳥里山クラブ

「木津川市で歴史を辿る」

2026年6月12日(金)

コース：

高の原駅～石のカラト古墳 ～池谷公園～アル・プラザ木津
～藤原百川公墓～伝和泉式部墓～平重衡首洗池
～木津川堤防<昼食>～上津遺跡～平重衡墓（安福寺）
～泉橋寺～福寿園山城館～高麗跡～JR上狛駅

撮影・編集： *H.Kiyohara*

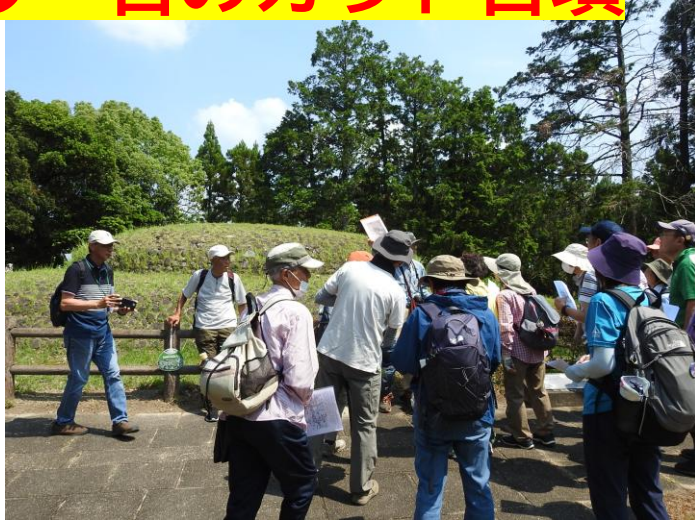
● 集合：近鉄京都線 高の原駅



● 石のカタト古墳方面へスタート



● 石のカタト古墳



史跡 石のカタト古墳

の築造と推定され、昭和54（1979）年の発掘調査で上段が円形（直径約9.2m）下段が方形（一辺約13.8m）とわかりました。下段の表面には、30cm大の石を葺いていましたが、上段の葺石はほとんど失われていた。石室は壁画古墳として知られる飛鳥高松塚古墳と同じ横口式石槨で間口1.15m、奥行2.6m、高さ1.2mありでできています。

石室が唐櫃に似ていることからつけられたらしく、石室内は盗掘のため、荒らされていましたが、漆塗りの棺蓋の破片、金・銀の玉など豪華な副葬品の一部が出土しました。

わかりませんが、奈良時代初めの貴族と推定され、平城京の北郊である奈良山丘陵に造られた数少ない終末（77）年の復原整備の後、平成8（1996）年に国の史跡に指定されています。

● 池谷の道を行く



● 池谷公園： トイレ・休憩



キスゲ



● 田植え研修中：高校生



ダイサギ



● 新殿神社を通過



● 藤原百川公墓

- ・藤原百川は、奈良時代末期の上級官人で、称徳天皇が僧侶の弓削道鏡を皇位につけようとした宇佐八幡宮神託事件の折、勅使の和気清麻呂に働きかけてその企てを防ぎ、宝亀元(770)年に称徳天皇が没すると道鏡を追放して光仁天皇を擁立した。
- ・藤原百川は、山部親王(後の桓武天皇)を皇太子に立てて、長岡京および平安京への遷都への道を開いた人物で、宝亀10(779)年7月に参議中衛大将兼式部卿従三位の地位で没した。



● 藤原百川公墓



● 伝和泉式部墓方面へ



● 伝和泉式部墓

- 平安時代の中古三十六歌仙のひとりで女流歌人、『和泉式部日記』『和泉式部集』などの歌集を残した和泉式部の墓と伝わる。
- 木津で生まれ宮仕えの後、木津に戻って余生を送ったとも伝えられているが、生誕地含め死所についても諸説あり、墓といわれるものは、北は岩手県北上市から南は山口県山陽小野田市まで数多く存在する。



和泉式部の墓

木津川市木津殿城

和泉式部は、越前守大江雅到の娘で、清少納言・紫式部とともに平安時代中期を代表する女流歌人である。生没年は不明。おおむね十世紀末に生まれ、十一世紀初めに六十歳前後で没したものとされる。

彼女は、はじめ和泉守橘道貞の妻となる。そのため和泉式部と呼ばれる。子供がやはり歌人として有名な小式部内侍である。その後道貞とも別れ、冷泉天皇の泉子、為尊親王・敦道親王と恋愛する。このときの恋愛経験を告白的に物語ったものが「和泉式部日記」である。両親王と死別した後、藤原保昌の妻となる。晩年は、歌作がなく、全く判っていない。式部二十歳前後から五十歳頃までの歌数千首を集めたものが「和泉式部集」である。

墓は高さ約一・三メートルの五輪塔で、中世に建立されたものであろう。伝承によれば、式部は木津の生れであり、宮仕えの後再び木津に戻り余生を過ごしたといわれているが、この伝承を裏付ける資料がなくて残念である。

いづみかは 水のみわたの 松のうへに
山かけ涼し 秋のはつかせ

(家集)

和泉式部の墓と称するものは全国各地にあり、なかでも京都市中京区誠心院のものが著名であるが、いずれも極め手を欠いている。

昭和六十一年三月

木津川市教育委員会

● 平重衡首洗池・不成柿跡



● 木津川堤防<昼食>



●上津遺跡



上津遺跡

木津川市木津宮ノ裏

上津遺跡は、木津川の水運に係りした奈良時代の遺跡です。

遺跡の性格は、宇治川・桂川と合流し淀川となって大阪湾に注ぐ木津川の水運を利用して、各地から物資を大和へ運ぶため設置された国による官営施設（官衙）と推定されています。

昭和51年から宅地開発等により発掘調査が開始され、東西二町（約218m）以上の範囲に施設が置かれていたことが明らかとなってきました。

160m以上も東西に延びる溝跡やこれに並列する柵列跡、三面に庇をもつ建物を含む数棟の掘立柱建物跡、多数の土坑跡などが発見されています。

また、これらの遺構に伴って多種多様な遺物が出土しています。この中には、当時の最高級の土器である彩釉陶器や、官人が用いたと考えられる円面硯・須恵器を転用した硯・帶金具・鞆尻金具などがあります。他にも当地の需要をはるかに越えた量の須恵器や、当遺跡で葺かれていたとは考え難い平城宮や恭仁宮と同じ文様の瓦などがあって、これらは他処から運んできたものと考えられます。

文献によると、奈良時代の木津川（当時は泉川）南岸は、「泉津」と呼ばれる港が開かれ、木材を始めとする各種物資の調達を役目とする官衙や南都諸大寺の出先機関「木屋所」が設営されていたことがわかります。

上津遺跡は、この中でも官衙の「木屋所」であったと考えられています。

● 御霊神社



●平重衡墓（安福寺）

- ・本尊の「阿弥陀如来像」は東大寺・興福寺を焼き打ちにした平重衡が1185年6月、木津川河原で最後に拝んだ引導仏と伝えられている。
- ・本堂は村人が平重衡を哀れんだので「哀堂(あわんどう)」と呼ばれている。
- ・また重衡を埋葬した場所に現在の十三重石塔が建てられたと言われている。



●平重衡墓（安福寺）



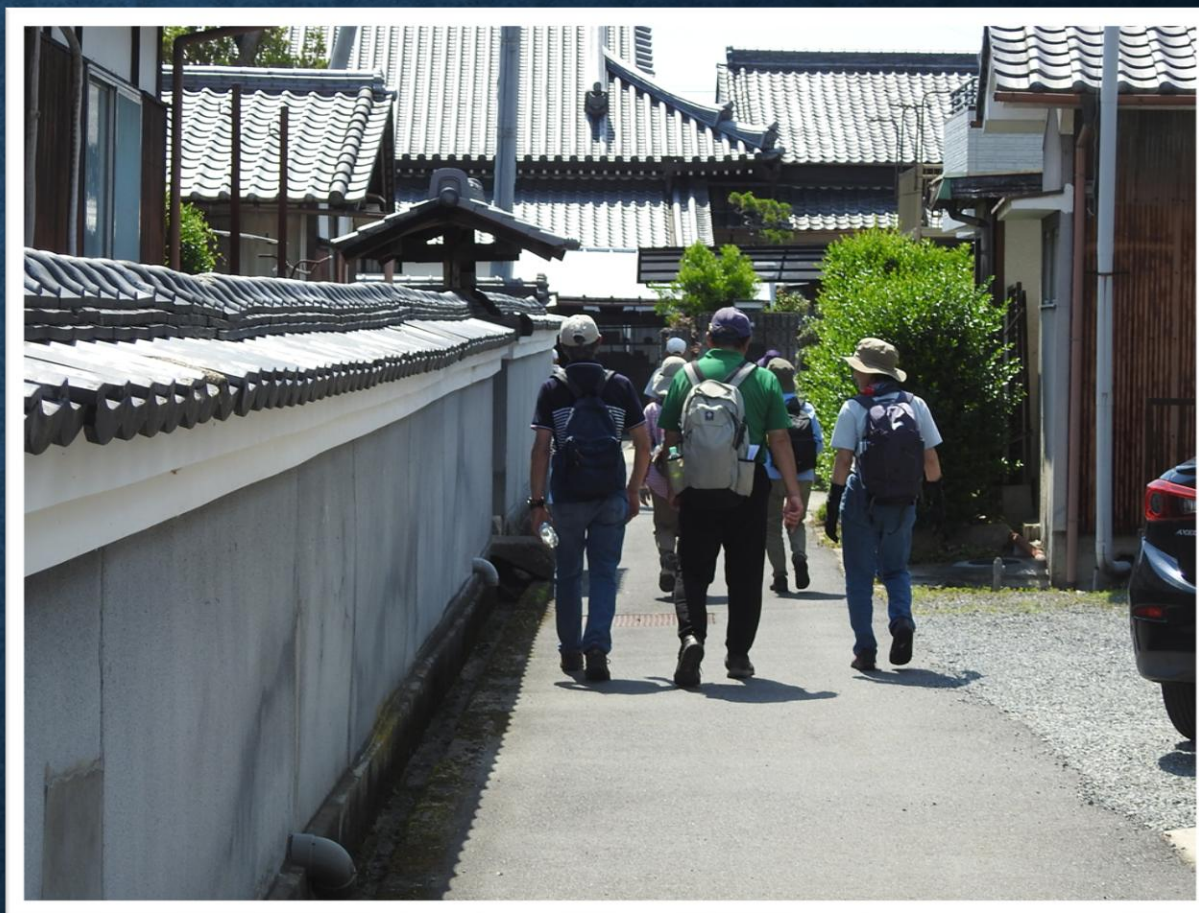
● 木津川鉄橋方面へ



● 木津川鉄橋を渡る



● 泉橋寺方面へ



● 泉橋寺

- ・京都と奈良を結ぶ街道と木津川水運の要所であり、741年高僧行基によってこの地に泉橋が架けられ、その前年に橋の管理と守護のため北岸側(右岸)に泉橋院が建立された。これが現在の泉橋寺である。
- ・かつては本堂や五重塔、方丈、鐘楼、経蔵、鎮守社など備え大規模な寺院だったが、中世の兵火などで衰退していった。



● 泉橋寺

泉橋寺

泉橋寺は奈良時代の高僧・行基によって、木津川に架けられた泉大橋を守護・管理するために建立された寺院である。

その門前にある地蔵石仏は、永仁三年（二九五）に石材が切り始められて、その十三年後の徳治三年（三〇八）に地蔵堂が上棟・供養されたもので、またその願主は般若寺の真円上人であった。その時、地蔵石仏の本体はほぼ完成していたとみられるが、台座と光背は、その後完成が目指されたもので、この地蔵石仏の造立がいかに大がかりなものであったかが偲ばれる。

一四七〇年頃から応仁の乱の影響が南山城地域にも及び、文明三年（二七二）に大内政弘の軍勢が、木津や上狛を攻めて、焼き払った際に、泉橋寺地蔵堂も焼かれて石仏も焼損、それ以来地蔵石仏は、露座のままとなっている。

現在みる地蔵石仏の頭部と両腕は、元禄三年（二六九）に修復されたものである。



● 泉橋寺の掲示版

悔なき
 生ありや
 ビールの泡こほし

鈴木真砂女

全きこと梅ゆることの
 白常のこと梅ゆることの
 なんと多きことか

大笑い
 素敵な笑顔
 造りまじやう
 ハジミハジミハジミ
 福笑い
 今日を一日
 幸せ
 招く
 高笑い
 コハコハコハ
 お地蔵様の
 おかげです
 笑顔は良薬
 健康の秘訣

● 福寿園でトイレ休憩後、上粕駅手前で一次解散



● 有志メンバーで高麗跡へ



史跡 高麗寺跡

名 称：高麗寺跡（木津川市山城町上野高麗寺、森ノ跡）
 指定年月日：昭和15年8月30日 平成22年2月22日（追加指定）
 指定面積：20,100.5㎡

史跡 高麗寺跡

高麗寺は、飛鳥時代（7世紀初頭）に創建された寺院です。寺域は、東西約190m、南北約180m（回廊で囲まれた創基中心部の大きさは東西約61.9m、南北約5.6m）を有し、木津川が西から北に大きく流れを変える北岸の河岸段丘上に立地し、木津川舟運の港（上津遺跡）の対岸に位置しています。史跡の指定面積は、寺域の約60%にあたります。

高麗寺の呼称は9世紀に書かれた仏教史書『日本書紀』中巻第18話に見ることができ、周辺には、「上野」や「下野」のように「野」ともなう地名を遺しています。4〜7世紀に朝鮮半島北部を支配した高句麗から渡来した氏族（高麗）氏と関係する寺院と考えられています。創基配置は東に塔、西に金堂を配する法起寺式で、背後の講堂から再興に延びた回廊は塔・金堂を囲み中門に至りますが、南門・中門・金堂が南北一直線に並ぶのが特徴です。

高麗寺の創基は大規模な修理が奈良時代末から平安時代前期におこなわれましたが、鎌倉時代には完全に姿を消したと考えられます。高麗寺跡における発掘調査は、史跡指定に先立つ昭和13年（1938）調査や昭和59年から63年（1984～1988）の寺域確認調査、史跡整備にともなう基礎調査が平成17年から21年（2005～2009）に実施されています。

史跡整備は、平成22年（2010）に開始され令和3年（2021）に史跡公園として開園しました。

高麗寺創基復元図（南西から 作畫：早川和子）

木津川市航空写真（南西から平成20年）

創基配置図
 令和3年作成

● 高麗跡



● 高麗跡



● ゴール：JR上狛駅

